

平成28年度第2回 向日市いじめ防止対策推進委員会 会議録概要

1 日 時 平成29年2月8日(水)午後1時～同1時30分

2 場 所 京都府乙訓総合庁舎 第2会議室

3 出席者

委員長	本間 友巳	京都教育大学教授
副委員長	平 正博	弁護士
委員	尼子 薫	小児科医
	伊坂 はるみ	臨床心理士
	福井 景子	臨床心理士
学校教育課 (事務局)	野田 昌之	担当課長兼総括指導主事
	藤野 剛志	主幹

傍聴人 1人

4 内 容

- (1) あいさつ
- (2) 調査(2回)の概要報告
- (3) 質疑

5 概要

(1) 本間委員長あいさつ

(2) 平成28年度「調査の概要」報告

事務局

・認知件数

小学校：770件(1回目)、664件(2回目)

中学校：72件(1回目)、60件(2回目)

合 計：842件(1回目)、724件(2回目)

・解消件数

小学校：757件(1回目)、657件(2回目)

中学校：58件(1回目)、49件(2回目)

合 計：815件(1回目)、706件(2回目)

・一定解消したが継続指導中

小学校：13件(1回目)、7件(2回目)

中学校：14件(1回目)、11件(2回目)

合 計：27件(1回目)、18件(2回目)

(3) 質疑等

委員	第2回で継続になっている子は、第1回から解消していないか。
事務局	1回目からの継続は5人いる。いったん解消はしているものの、学校として継続して見守りたいとの意向である。本人も無いと言っているが、周りの子の状況も鑑みて丁寧に見ている。
委員	態様の「その他」の内容と、組織的な対応の具体例は何か。
事務局	児童生徒の自己申告もあるが、項目にないもの「だっこされる」など「いやな思い」をした事象。 事象や状況を担任だけでなく学年、学校の「いじめ対策委員会」などの

	チームとして把握して、組織で指導支援に取り組むこと。
委員	児童生徒の立場に立った親身な指導をしているとは、加害なのか被害なのか。
事務局	両方の立場の児童生徒になる。
委員	児童生徒の両方の立場を丁寧に指導していくのは大切であるが、法の精神に則って、被害者を優先させることを忘れてはいけない。被害者を全力をあげて守ることであり、間違えないようしてほしい。
	向日市のいじめ解消の位置づけ、基準、目安はあるか。また、継続事象の重大事象になるなどのリスクの高いものはあるか。
事務局	明確に解消の定義を位置付けていない。アンケート調査時に継続事象になっている子の状況を丁寧に見ている。もし継続しているならばどのような状況かを聞いている。 また、現在重大事象はない。重大事象に関わる項目の長期欠席者の状況も追跡してみている。
委員	気になる子について継続してみるなど、リスクを下げる取組が大切なで、教育委員会からも関わっていくことを継続してほしい。 また、加害行為があるかないかでなく、法では被害者を受け止め、不安感の解消や対応にあたることがそもそもである。
委員	1回目のアンケート後に、夏休みになり落ち着いて、2学期になりしんどくなるケースはないか。
事務局	報告はありません。
委員	面談では、いじめる動機について聞くことも必要。その子の背景的なもの、友情や好き感情などがあったり、面白くないことの八つ当たりがあったりなど、なぜいじめているかの検証も必要と考える。
委員	支援方法の内容を明確にする。学校で組織的対応をされているが、どこまでできるのか。担任や学校によって温度差がないように、研修を積むことも大切となる。
委員	被害者ケアや加害者ケアも大切である。 解消の数を競うのではなく、いかに早く事象をつかむか、どのように解消に向けた対応を進めるのかが大切と考える。
事務局	解消数を気にすることよりも、どのような支援や指導をしていくかを大事にしている。
委員	1年から6年までの間に、一定の子が固定しているのか。学級が変わっても変化のない事例や数字には出ないものなどはあるか。
事務局	状況は変わっていく。いじめに関して、子ども達も成長し、防ぐような見方をする子もいる。アンケートにはないと言っているが、学校全体で見守っていることもある。
委員	意外に周りが気づいていて、特に中学校では、あぶり出しが難しいこともあると思うので、複数の目で対応することが大切である。

委員	アンケート後には、担任の思いとかは言えるのか。
事務局	学校内の学年会やいじめ対策委員会に担任としての思いは出せる。アンケートによって、子ども同士のつながりなど新たな発見もあり、教師にとってもいい機会になる。
委員	担任が気になる子がどう書いているのか、どう思っているのかを知る機会になり良い。日頃の自分の見方、気付きを振り返るチャンスとしており、組織的な対応にすれば、次に生かす教訓になる。
委員	せっかくのアンケートが形骸化しないように、生かすようにしてほしい。生徒指導の力や児童生徒理解など多忙で感覚が下がらないようにアンケートの意義をしっかりと受け止め、ルーティン化しないように教育委員会からの指導支援として生かしてほしい。